

2015年12月20日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書1章67節～2章7節

説教：平和に導く主

1 ヨハネの父ザカリヤ

1) ものが言えず、話せなくなる

クリスマスと言えば、イエス・キリストのお誕生と決まっています。出も今日の箇所では、ふたりの子ども誕生のことが語られていて、初めての方はとまどったかもしれません。今日は、二組の夫婦のことを取り上げます。最初はザカリヤとエリサベツ、そして二つ目がヨセフとマリヤです。まずザカリヤ夫婦から見ていきます

ザカリヤが祭司として神殿で奉仕していたとき、御使いガブリエルが現れ、「あなたの妻エリサベツは男の子を産むことになる。名をヨハネとつけなさい」と告げます。これを聞いたザカリヤは疑ってしまいます。そうすると御使いはこう言うのです。「これらのことが起る日までは、あなたは、ものが言えず、話せなくなります。私のことばを信じなかったからです。」事実、ザカリヤはそのときから十ヶ月間、口がきけなくなります。御使いのことばを信じなかったので、罰を受けたというわけではありません。むしろザカリヤが喜ぶために、このようなことをしたと考えるべきでしょう。口が不自由になることがなぜ喜びなのか。にわかにな得できないかもしれません。でも、今日の箇所を読むと、ザカリヤが心の底から喜んでるのがわかります。いったいザカリヤは何を喜んでいいのか。細かく見ていきましょう。

2) ダビデの家に救い主が生まれる

68、69節を読みます。「ほめたたえよ。

イスラエルの神である主を。救いの角を、われらのために、しもベダビデの家に立てられた。」救い主がダビデの家にお生まれになられたと言っています。どうしてザカリヤは、救い主がダビデの家に生まれたとわかったのでしょうか。御使いが彼のところに現れたときは、そんなことはひとことも語っていませんでした。探偵小説のような言い方をすれば、情報源がどこかにあるはずですが、答えは妻のエリサベツです。

時間は少しさかのぼります。この夫婦に男の子が生まれる六ヶ月前のこと。あるとき、親戚のマリヤがエリサベツを訪ねて来ました。マリヤのあいさつのことばを聞くやいなや、エリサベツは聖霊に満たされ、マリヤが救い主の母となることがわかり、大喜びします。マリヤは、そんなエリサベツを見て驚いたでしょう。玄関の前に立っていたときは、不安で一杯でしたが、いまは勇気をもって自分の身に起きたことを話し始めます。いま自分は婚約中の身で、夫となるヨセフはダビデの家の血筋の者である。つい数週間前、御使いが現れて不思議なことを語ったのだ。私は聖霊によって救い主を産むことになると思う。でも、いったいこれからどうなるのだろうか。不安で一杯のマリヤでしたが、エリサベツから励ましをもらって家に帰っていきます。そんなことが六ヶ月前に起きていました。

ザカリヤは、妻のエリサベツからマリヤのことを聞き、旧約で預言されていたとおりに、救い主がダビデの末として、いま来ようとし

ていることを確信しました。

3) 平和の道を備える者

そのことに気がついたとき、十ヶ月前に御使いが自分に語っていたことばを思い出しました。「あなたに生まれる男の子、ヨハネは救い主に先立って、人々を主のために整える働きをする者となる。」それを聞いたときは、何のことかわかりませんでした。でもいま、理解できました。神のご計画がはっきりと見えます。幼子ヨハネの役割はなにか。76、77節。「幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう。主の御前に先立って行き、その道を備え、神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。」

ヨハネは救い主に先立って、主の道を備えていく役割を果たしていきます。その主の道はどこに続くのでしょうか。79節。「われらの足を平和の道に導く。」

今年もふり返ると、テロや紛争の話を書かない日はありませんでした。だれもが、世界が平和であるようにと願います。けれども、アダムとエバが罪を犯した日以来、人々はねたみあい、争いあい、人を殺すようになりました。それが今も続いています。いったいどうすればよいのでしょうか。多くの人々がいろいろな智恵を考えました。けれども戦争や殺人はなくならない。聖書はなんと仰っているでしょう。「罪の赦しによる救いの知識」「われらの足を平和の道に導く」方がいなければ、ほんとうの平和をいただくことができない。

いま、世界中の人たちがクリスマスだと言って、飲んだり騒いだりして楽しんではいません。けれども、私たちがこの方を十字架で殺したのだということは受け入れません。ま

して、自分は罪人であるとおの方の前で告白する者はまれです。皮肉なことですが、救い主の誕生を祝いながらも、救い主を知らないと言っているようなものです。

2 イエスの母マリヤ

1) 旅行中の出産

その平和の主、救い主がどのような顛末で世にお生まれになったのか、こんどはヨセフとマリヤの夫婦に目を転じていきます。出産予定日が間近に迫っていたとき、思いがけないことが起きました。ローマ皇帝アウグストが、イスラエル国全住民の戸籍登録をせよという命令を出したのです。今であれば、最寄りの役場に行けばいい話ですが、当時は違ったようです。それぞれの先祖の町に行ってそこで住民登録をしなければなりません。ヨセフはダビデ家の血筋ですから、ダビデの町とも呼ばれるベツレヘムに行くこととなります。マリヤもいっしょです。ベツレヘムまでは、ナザレから直線でも120キロメートルはあります。たとえろばに乗ったとしても、出産間近の人がこんな距離を移動するのは非常識です。でも、ローマ帝国の命令は絶対です。どんな事情があっても行かなければなりません。ヨセフもマリヤも大変な苦勞をしました。幸い、無事にベツレヘムの町に着きましたが、そこでマリヤは産気づいてしまいます。住み慣れた家ですのではありません。旅行者でごった返している宿屋です。場所がなく、家畜小屋で出産しなければならなかったというのです。

2) 家畜小屋

家畜小屋について少し説明が必要です。みなさんの頭の中では、宿屋とは別の所に建て

られた粗末な家畜小屋を想像すると思います。そのように描かれた絵も多い。しかし最近の研究で、実はこの家畜小屋は宿屋の中にあつたものだろうということがわかってきました。一昔前の日本でも同じ風景がありました。私が育つた家は、外から見ると普通の建物の形をしていましたが、中に入ると玄関のわきに牛がいたのです。牛と人間が同じ建物の中で生活していました。実はイスラエルもそうだった。なのでマリヤは、宿屋の中に作り付けられている家畜小屋で出産した。

マリヤとヨセフにとって最初の出産です。おまけに旅の宿でのことですからずいぶんと心細い話です。それでも近所の人たちに助けられ、なんとか無事に産むことができました。

3 救い主イエスの目印

1) 飼葉おけに寝させられる

その赤ちゃんがどんなふうに使われたのかが、7節にあります。「それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。」

家畜小屋は想像しておわかりのとおり、きれいなものではない。床にそのまま寝かせる訳にはいきません。それでしかたなく飼葉おけに寝かせることにしました。飼葉おけと言ってもぴんと来ないでしょう。ろばなどのえさを入れるおけです。きれいなものではない。水で洗ってもにおいがします。そんなところに寝かされます。神である方が人なって来られたとき、最初に寝かされた場所がそんなところでした。

2) 布にくるまれる

そして、ここにわざわざ「布にくるんで」と書かれていることに注意してください。日

本でも「おくるみ」というものがあります。赤ちゃんを布にくるむという習慣は、世界中どこにもあるそうです。イエスの時代も布でくるむことは普通に行われていたと思われます。であれば、わざわざ「布にくるんで」と書く必要がなさそうです。でも、このあと羊飼いたちが、幼子イエスを探してやって来るのですが、そこでも「布にくるまって飼葉おけに寝ている」赤ちゃんが目印だと御使いから教えられています。ここに何か大きな意味があるように思います。

人々は、平和はどこにあるのかと探しています。そして聖書は、イエス・キリストこそ平和の主、救い主であると教えています。そうしたら人々は質問するでしょう。「その救い主はどこにいるのですか。目印は何ですか。」答えは、「布にくるまって飼葉おけに寝ておられる方を探しなさい。」

でも今は生まれたばかりの赤ちゃんを探すものではありません。こんどは、死んだ方を探すのです。この方は後に十字架につるされ、殺されていきます。そのからだはどう処理されたか。23章53節にあります。「それから、イエスを取り降ろして、亜麻布で包み、そして、まだだれをも葬ったことのない、岩に掘られた墓にイエスを納めた。」

お生まれになった救い主は布にくるまれ、飼葉おけに寝かされます。その姿は、やがてこの方が殺され、死に、布でくまれ、墓に納められていくことを示しています。

これでなにかわかりますか。この方は、世にお生まれになったときから、すでにこの方は十字架に向かっておられたということです。私たちを救い、平和に導くために、主がこれほどまでのことをしてくださっていた。恵みを覚えるクリスマスであればと願いま

す。